

温 故 知 新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介 (22) 平成 13 年 5 月 1 日

農政・救荒シリーズ

民政担当参考書としての救荒書の『救荒事宜』(Q611 - 35)

伊勢の津藩(藤堂藩)で活躍した漢学者齋藤拙堂(寛政9(1797)年~慶応元(1865)年)は、江戸昌平黌で寛政の三博士の一人古賀精里に学び、逸材さを評価されました。文政2(1819)年に藩校有造館の儒員試補となり、さらに嘉永2(1849)年に督学になると、沈滞気味であった学風を盛り返したと言われていいます。彼は、漢学者の域にとどまらず、海外知識を吸収し、嘉永2(1849)年には蘭学を学ぶために洋学館を設け、また自分の孫に種痘を施し、種痘の必要性を人々に知らせました。彼の名は『拙堂文話』により、全国に知られ、吉田松陰などの学者や志士たちが彼のもとを訪れました。さらに庶民の子弟の教育機関として修文館も設立しました。

『救荒事宜』(当館所蔵は写本)はこの齋藤拙堂が天保2(1831)年に記した救荒書で、鈴木武助の『農諭』などを通じて、過去の統計上近年中に飢饉が到来することを予測し、その凶荒に備えるべく本書の執筆に取りかかりました。拙堂は本草家でも農政家でもありませんが、学識を活かし、和漢の救荒書・農書・史書など多岐にわたって救荒の事例・格言などを多数引用して、民政担当者の参考資料としての救荒書を作成しました。

拙堂の日本の救荒書に関する知識は特に深く、鈴木武助の『農諭』、建部清庵の『民間備荒録』、宮崎安貞の『農業全書』、大蔵永常の『除蝗録』、『豊稼録』、清原重巨の『有毒草木図説』などの基本的な救荒書を整理し、抜粋・紹介しています。

拙堂の予測通り、脱稿の翌天保3(1832)年には凶作となり天保6(1835)年には風水害による減収、その翌年には天保の大飢饉となり、おびただしい餓死者が生じ、諸国には暴動が頻発しましたが、拙堂の救荒策が実施されており、津藩では暴動も餓死者も生じませんでした。しかし、『救荒事宜』は津藩では当時は発行されず、拙堂門下の大垣藩家老小原忠寛により、大垣藩主に提出され、約30年後の文久元(1861)年に刊行されました。また、飢饉に苦しむ民衆を救おうと反乱を起こした大塩平八郎もたびたび津藩を訪れ、拙堂の救荒書に触れたと言われていいます。

参考文献

- 『県史シリーズ24 三重県の歴史』(218/20)
- 『三重県史 下巻』(218.56/5/2)
- 『齋藤拙堂・土井 牙』(121.08/108/39)
- 『日本経済大典 46巻』(332/192/46)